猿新聞

森林再生・緑の税
野生動物と共存

かつて日常生活と密接なつながりを持って管理されてきた里山は、地域ごとに特色ある文化や景観を 形成するとともに、多様な生物を育んできました。

燃料革命や急速に進む過疎・高齢化など社会情勢の変化により利用されなくなったことで、荒廃が進み様々な問題が生じています。

特に問題なのは、里山の荒廃により緩衝地帯としての機能を無くし、中山間地域の獣害の深刻化を加速させていることです。

さらに、里山の荒廃は生態系のバランスを崩し、里山の植物が絶滅の危機にさらされています。また、反面、シカやイノシシなどの個体数増加に繋がるなど地域の生態系に大きな悪影響を与えています。

絶滅の危機に瀕する多くの種を救わなければならない一方で、増えすぎた種や外来種とどう付き合うのかも重い課題となっています。

里山の再生
名張市上三谷

被害防除対策は二つに分けることが出来ます。一つは、電気柵やトタン柵の設置、忌避剤などのハードウェア的な防除。もう一つは、栽培する作物の選定、農地周辺の環境の整備、追い払いなどのソフトウェア的な防除です。

防護柵の設置は速効性のある対策ですが、現在のトタンやネットを 農家が個別に設置する方法では効果が低い上、景観や耐久性の面で問題があり、全国的に見て被害が減ったとは言い難い現状です。この現状を踏まえ、近年、里山の機能が改めて注目されています。

『里山が野生動物と人里との緩衝地帯だったということを……』。

私たちが求めているのは「野生鳥獣との棲み分け・共存」の実現です。

被害を受ける中山間地域は、高齢化や人口減少が進展する中、鳥獣害が与える直接的な損害は勿論ですが、農家のやる気まで奪って、耕作放棄地の拡大に繋がるなど、農家にとって鳥獣害は、まさに死活問題なのです。更に、耕作放棄地の拡大が更なる里山の荒廃へと繋がっています。

里山が持つ本来の機能を、今一度見直し再生を図ることにより、野生鳥獣の潜み場をなくし、農地への出没や侵入抑止に繋がり、農作物被害の軽減が期待できます。

野生鳥獣との棲み分けを図る上で重要なのは森林の再生です。

今や日本林業は衰退し、森林管理を担う林業労働者の減少で、樹木の枯死や下層植生の消失による裸地化など森林の公益的機能に大きな影響を与えるなど深刻化。ましてや野生動物が生息できる環境ではありません。

森林には、地球温暖化を進めてしまう二酸化炭素を吸収する機能があり、森林再生は温暖化防止にも繋がるのです。

また、森林の健康低下が、松枯れやナラ枯れ被害を招きます。枯れたマツやナラなど枯損木の伐採と、森林健全化に向けた植栽が必要です。

林業の不振で森の多くの樹木たちが老樹化を迎えていますが、人間の的確な管理さえあれば、老樹でも春には若芽を芽吹かせ森林は若返るのです。

里山の再生
名張市矢川

森林は、清らかな水や空気を育み、土砂災害や地球温暖化を防止するなど、私たちの暮らしに欠かすことのできない「多面的機能」を有しています。

この多面的機能を金額に換算すると、国民一人当たり年間約１４０万円の恩恵を受けているといわれています。

三重県では「災害に強い森林づくり」と「県民全体で森林を支える社会づくり」を進めるため、平成26年4月1日から「みえ森と緑の県民税」を県民1人につき１０００円徴収しています。

その使途は？。

森林や里山の再生には多くの労働力や多額のお金が必要です。また、その維持管理は住民に大きな負担を与えることになります。

「緑の税」の使途は、この目的を実現するためにあるのです。加えて、森林荒廃防止に繋がる、国産材利用拡大のための助成に充てることも必要になります。

森林再生には、行政をはじめとした様々な団体・個人の一体となった支援と、継続的な協力体制が不可欠です。

いずれにせよ、「緑の税は、森林を守ることにある」という理念だけは、くれぐれも忘れないでほしいと思います。鳥獣害問題は、私たち人間がもたらした独善的な活動が背景にあるということを強く受け止め、私たち自身が解決しなければならない「環境問題」の一つです。都道府県、市町村や各地域住民、関係団体が連携を図りながら問題解決を推進することが重要です。

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:220部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

コロナが食料危機を招く
蝗害は対岸の火事ではない！

今、コロナウイルスが全世界を震撼させています。

新型コロナウィルスの感染拡大により世界各地で食料不足となる可能性が指摘されています。

各国が講じる移動の禁止により労働力が不足し、農産物の収量や生産量が減少するとみられることや、食料難を警戒する生産国の輸出制限などが原因で、このままでは世界的な食糧危機に繋がる恐れがあるといわれています。農業生産国では農業の多くを外国労働者に依存していて、労働者の確保が今後の農業存亡に大きく影響すると言われています。

世界同時多発的に、食料連鎖危機が起きる懸念があると関係者は警鐘を鳴らしています。

さらに、新型コロナウイルス発生と、ほぼ時を同じくし、アフリカ東部ではバッタ（サバクトビバッタ）が大発生。その大群が農作物などを食べ尽くす蝗害（こうがい）が発生しています。おびただしい数のバッタの大群が農地の作物を食い尽くし、ここ数十年で最悪の蝗害が広がっています。コロナウイルスの陰に隠れて大きな波紋を呼んでいませんが、コロナが無ければ世界を動揺させる大ニュースになっていたと思われます。

なぜここまでバッタが大量発生し、そして人間の食糧を食い尽くしているのか。

その原因を探ると、どうやら地球温暖化が影響しているようです。このまま地球温暖化に歯止めがかからなければ、さらなる地球温暖化によって蝗害が加速度的に広がる未来が見えて来ます。

1平方kmに集まるサイズの比較的小さな群でも、1日あたりで人間3万５０００人と、ほぼ同じ量を食べるといわれています。懸念される食糧不足は人道的危機で、コロナによる食糧危機とのダブルパンチです。

バッタの群れは、国境を接する中国にも迫っており中国は危機感を持っていますが、日本にとっては蝗害そのものの影響は１００％無いと言われています。だが、決して対岸の火事ではありません。

日本の食料自給率は37％（カロリーベース）。残りは輸入に頼っている日本としては食料品の品薄や高騰など、ボディブローのように後々被害出てくるのは確実なのです。

端的に言うと日本での食べ物の生産高は、全体の37％。不足分の63％は海外からの輸入に頼っているということになります。このように日本の食料自給率は主要先進国のなかでも最低の水準であることは周知通りです。日本では、飽食の時代が続いていて、食料の危機など微塵も感じていないという人は殆どでしょう。

地球温暖化で台風や大洪水など、異常気象が常態化している日本では、いつ何時（なんどき）大きな自然災害が発生するかもわかりません。それに備え、食料だけでも自給自足の体制を整えておきたいものです。

日本では蝗害とは、あまり馴染みのない言葉ですが、一応、日本でも明治時代に北海道でトノサマバッタによる蝗害が発生した記録があるそうです。

大空に舞うバッタの大群
matomedane.jpより引用

鹿を知ろう③

シカは、ウシのように4つに分かれた胃を持ち、反芻による消化を行うので、植物であれば少々固いものでも食べます。餌の少ない冬季では、樹木の皮や落ち葉まで食べ尽くし臨床を裸地化させてしまいます。

山に行くと、木々の2メートルほど下の部分は枝や葉っぱ下草が全然無く遠くまで見通しがよくなっているところがあります。これを、ディアーライン（鹿、摂食線）と言います。

生息域を広げているニホンジカですが、おもに里山の近くで生活するものを里ジカ、奥山に生息しているものを山ジカと呼んでいます。里ジカは、主に農作物被害、山ジカは、主に森林被害を起こしています。

近年、シカは標高の高い山岳地帯にまで進出し、稀少な高山植物を食べ尽くし、国の天然記念物であるライチョウが絶滅の危機にあると報じられています。

シカの蹄には、ヤマビルが穴をあけて寄生すること（有穴腫瘤）が知られており、ヤマビルの生息域の拡大にシカが関与していることが疑われています。

シカの臭覚は人間の数千倍といわれています。また、1キロ先の音を聞き分ける聴力があるといいます。視覚は、色盲だと言われていますが、赤色の識別視力が発達しているそうです。「脅し」には赤色電灯が良いかも…。

2メートル以上の柵を越える跳躍力あると言われていますが、田畑への侵入は柵下を潜ることが多いです。最高時速60kmの速度で走り、泳ぎがとても上手らしい。

森林や高山植物に対するシカの被害が甚大です。シカによる森林破壊が動植物の生態系を変化させてしまう恐れがあるなど、自然の生きものが自然そのものを崩壊させかねない存在になっています。

シカが原因の交通事故は年間２０００件近くに上ります。原因は増えすぎです。増えすぎたシカは、捕殺せざるを得ないのです。

しかし、彼らも私たちと同じ命をもった動物です。彼らの命を奪う際には、できるだけ苦しめないことが必要です。また、彼らの命を奪う以上、彼らの体を有効に利用することが生命の尊厳を守ることにも繋がります。

獣害対策の意識改革

山間地域での農業は獣害対策抜きでは考えられません。

隣接の田畑に配慮しながら防護柵を設置した頃が今思い起こされます。気づかぬうち迷惑を掛けていたこともあったと思います。

これは10年程前の昔の話です。

ＡさんとＢさんが、山沿の畑で老後の生きがいとして毎年楽しみながら家庭菜園を行っていました。しかし、近年、サルによる被害が多く、収穫物はほとんど食べられない状況になり、Ａさんは、防護柵を設置しました。設置以降、Ａさんの畑は被害がなくなったが、Ｂさんの畑へ被害が集中しました。

その時、Ｂさんは次のように思いました。

「Ａさんが自分の畑だけを防護柵で囲んだから、サルがみんなこっちの畑へ来た。Ａさんは自分のことだけを考えている勝手な人だ。人が迷惑していること分かっているのだろうか？」と。

今、これと同じようなことが、奈良県と三重県の県境を挟んで起こっています。宇陀市龍口（大和龍口）と名張市竜口（伊賀竜口）のことです。大和龍口では、侵入防止効果が非常に高い、電気柵と一般柵を併用した「おじろ用心棒」を設置。一方、伊賀竜口は旧態依然とした柵。結果、サル群は大和龍口集落を避け防御の手薄な周辺の集落に集中するようになりました。

ここで考えてみましょう。

サルには県境はありません。対策を考える上で重要なことは、隣接する集落全体の合意形成です。特に県境を跨ぐ、複数集落を対象とした対策には、関連行政の合意形成は不可欠になります。

「大和龍口さんが自分の集落の畑だけを「おじろ用心棒」で囲んだから、サルがみんなこっちの畑へ来た。大和龍口さんは自分のことだけを考えている勝手な人ばかりだ。伊賀竜口が迷惑していること分かっているのだろうか?」となりますが、しかし、「大和龍口さんは集落みんなのことを考えて「おじろ用心棒」で囲んでくれたのだな…。名張市も、みんなのため、集落の餌場価値を下げるために何か協力しなければ」と考えることが必要です。

獣害対策は、個々で「点」として行なった場合、対策をしていない隣接地に被害が分散するだけです。集落でみんながまとまり、「面」としての対策を行なうことが必要です。

行政や住民個々の意識改革が重要です。

※「おじろ用心棒」とは、電気柵と併用した、兵庫県香美町小代で開発された防護柵。

ブレコントー服

狼と生態系

昔、日本には、２種類のオオカミが生息していましたが、狼が姿を消して100年余り　その後　鹿や猪が大幅に増えて、農作物などの獣害が増えています。アメリカイエローストーン国立公園でも、野生の狼が最後に駆除され、約70年にわたり狼の姿が消えた国立公園では、狼の獲物（えもの）であったエルク（アメリカアカシカ）の数が大幅に増加、天敵のいない環境下で大繁殖したエルクは、ポプラなどの原生林の若芽や幹の皮を食べ、長年にわたり国立公園全体に甚大な食害を及ぼしていたのです。それによりビーバーやウサギ、狐などの小動物や鳥類の生息数は激減し、広大な国立公園の生態系バランスは大きく崩れていました。1995年、そんな「鹿の楽園」と化した国立公園に、行政によって人為的に14頭の狼が放たれました。そしてその結果、これまでエルクに駆逐され失われた森の樹木が急速に成長回復し始めたのです。森林が回復するとともに、鳥が戻ってきました。

さらに、狼不在の間、森の捕食者として幅をきかせていたコヨーテが狼に駆逐された結果、コヨーテの餌となっていたウサギや野ネズミ、ジリスなどの小型動物の個体数が増加。すると、それらを捕食する狐やイタチ、アナグマ、猛禽類の生息環境が改善され、広大な国立公園の生物の多様性が増え、生態系だけでなく、環境までもが本来の姿を取り戻したのでした。生き物の調和のとれた大自然を見事に蘇らせたのは生物学者でも環境保護団体でもなく、捕食動物である狼でした。生態系をあるべき形に回復させた狼の存在は、私たちに生態系バランスの大切さを教えてくれます。

文・田北　利治

サル出没状況

▽名張周辺のサルの群れについて

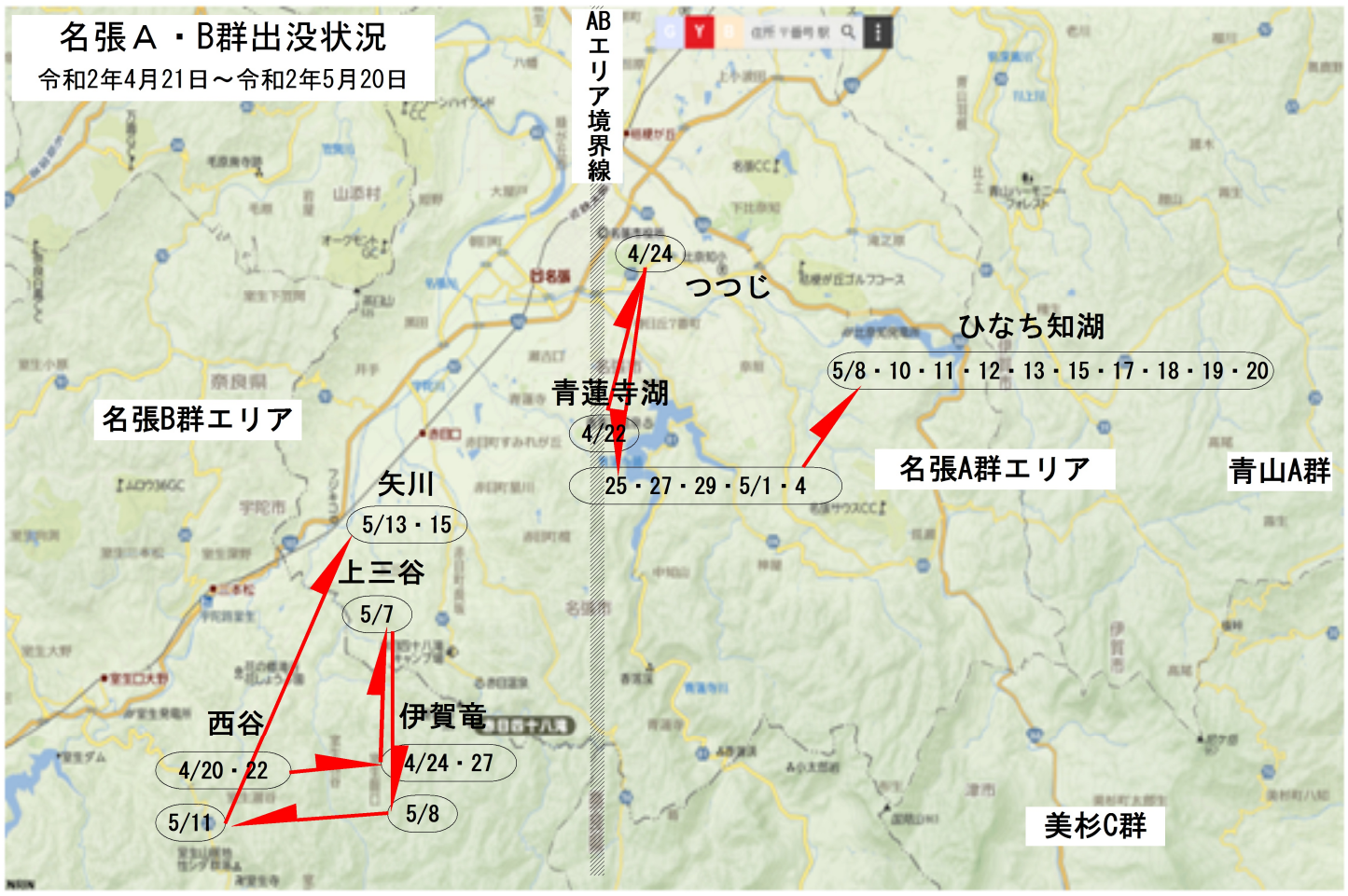
現在、名張市に隣り合わせで確認されている群れは、名張Ａ群・名張Ｂ群・青山Ａ群・美杉Ｃ群です。

平成16年頃は、現在のＡ群はＣ群と呼ばれていました。当時は発信機装着個体にＡ・Ｂ・Ｃ…と発信機付けた順番に名前をつけていたのです。私が提案して現在の形になっています。例、Ａ１・Ａ２という風に発信機のサルが減ったら元の１に戻る形にしています。

▽名張Ａ群の遊動域について。

青山方面への行動は平成27年度までは有るも、その後は青山Ａ群の出現（仮定分裂したのか）により行かなくなりました。その後平成29年に大量捕獲が実施され約６０頭位の群れが23頭位に激減し遊動域が大幅に変わりました。

Ａ群情報・古川高志



B群情報

B群は、5月に入り上三谷・矢川周辺にまで足を伸ばしてきています。

B群は平成28年3月の大量捕獲で群れ数7頭に激減。元の頭数を回復するのは時間の問題といわれていたように、ジワジワと個体数が増加しています。

今のところ国道（R165）を越えて北側への行動はありません。だが、大量捕獲前、被害が多かった古大野・深野・鹿高への侵入は時間の問題だと思われます。3年余りサルの姿を見ない地域の畑は丸腰状態の無防備！。

早急な柵の修繕や新設が必要です。